

研究代表者 所属・職：社会福祉学部・講師

氏 名：安藤 佳珠子

研究課題名：ひきこもり支援の従事者のトラウマに対する知識や理解に関するインタビュー調査

研究の概要

目的：本研究の目的は、①ひきこもり支援の従事者が、支援対象となる当事者やその家族のトラウマをどの程度認識し、実際の支援に活かしているのか、さらに、②トラウマ体験が当事者や家族の回復プロセスにどの程度影響を与えていると認識されているのかについて、支援者へのインタビュー調査を通じて明らかにすることである。ひきこもり当事者には、過去のいじめや不適切な養育体験がトラウマ化しているケースが多く、家族もまた当事者からの影響でトラウマを抱える可能性があると指摘されている。しかし、現行の支援ではこれらのトラウマが十分に認識されていない場合があり、支援者の知識不足も課題となっている。本研究は、支援者のトラウマに対する知識や理解の現状を把握し、今後のトラウマ・インフォームド・ケア（TIC）に基づいた支援者研修プログラム開発に貢献することを目指す。

方法：調査対象者は、ひきこもり支援を実践する機関の長を選定する。対象者に対し、当事者やその家族がもつトラウマの認識や理解、支援におけるトラウマの影響について、半構造化面接によるインタビューを 2025 年 1 月～3 月に実施する。インタビュー時間は 1 人 120 分程度とし、内容は「トラウマの認識」「支援とトラウマとのかかわり」「遭遇するトラウマの主な種類やパターン」「サポートの方法」「回復のプロセスへの影響」「支援者自身のサポートや学び」「トラウマ教育・研修」などを軸に質問項目を設定した。研究の進展に伴い明らかになった眼球運動脱感作および再処理法（EMDR）などの新しいアプローチに関する質問項目も追加した。また、協力者のニーズに応え、EMDR を用いた面接の様子をイメージしやすくするための動画作成準備も行う。

達成状況・成果内容

日本福祉大学「人を対象とする研究」に関する倫理審査委員会への申請を行い、承認を得てインタビューを 4 名に実施した。

インタビュー調査を通じて、以下の点が明らかになった。

トラウマ認識の現状と課題：ひきこもり支援の現場では、いじめや不適切な養育、家庭内暴力などが背景にあるトラウマ体験を持つケースが多く認識されている。しかし、支援者によるトラウマの定義や影響の理解度には幅があり、専門的な知識やトラウマインフォームドケア（TIC）の視点を持ちつつも、必ずしもトラウマに焦点を当てた直接的な介入が中心ではない実態がうかがえた。むしろ、トラウマを強調しすぎることによる弊害（被害者意識の固定化などへの懸念や、「偽のトラウマ」への慎重な姿勢）も示された。

支援における「安心安全な環境」の重要性：トラウマの有無に関わらず、支援の大前提として「安心安全な環境（居場所）」の提供が極めて重要であると繰り返し強調された。無理に問題に向き合わせるのではなく、本人が安心して過ごせる中で、自己肯定感を育み、変化への動機を待つ姿勢が重視されている。居場所における良好な人間関係や、初めて来た人への対応なども環境の一部として認識されていた。

「寄り添い」と「働きかけ」のバランス：単に「聞く」「寄り添う」だけでなく、本人の「変わりたい」という気持ちをサポートし、具体的な行動や社会参加に繋げるための「動き」や「提案」を伴う関わりが重要であると認識されていた。ただし、本人の意思を尊重し、無理強いしない姿勢も同時に重要視されている。面談に来

ること自体が変化への意思表示と捉える見方もあった。

環境調整と多様なサポートの有効性：トラウマ対応として、個人の内面にアプローチするだけでなく、人間関係や物理的環境といった「環境調整」が有効である可能性が示唆された。環境が整うことでトラウマの影響が自然に薄れることも期待されている。また、個別支援だけでなく、家族会や自助グループ、エンパワーメントグループなど、多様なコミュニティリソースを活用したサポートの有効性も確認された。

支援者の専門性と組織的課題： EMDR などの専門的治療法への関心が見られる一方で、専門知識を現場で適用する際には慎重さが求められ、「知識がフィルターとなり邪魔になる」可能性も指摘された。また、現場の意見が支援方針に反映されにくい構造や、異なる価値観を持つ支援者間の調整といった組織運営上の課題も浮き彫りになった。

これらの結果は、ひきこもり支援におけるトラウマ対応の複雑さを示すとともに、今後の支援者研修や支援体制構築において、「安心安全な環境づくり」「多様なサポート資源の連携」「現場の声を反映した組織運営」といった視点が重要であることを示唆している。